

## 参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題	視点「富士山噴火への備えは万全か」
著者 / 所属	林 浩之 / 国土交通委員会調査室
雑誌名 / ISSN	立法と調査 / 0915-1338
編集・発行	参議院事務局企画調整室
通号	434号
刊行日	2021-4-28
頁	2
URL	<a href="https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20210428.html">https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20210428.html</a>

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください (TEL 03-3581-3111 (内線 75020) / 03-5521-7686 (直通))。

## 富士山噴火への備えは万全か

国土交通委員会 専門員

はやし ひろゆき  
林 浩之

宝永4年11月23日（1707年12月16日）、富士山の南東斜面で発生した噴火（宝永噴火）は、同年12月9日（1708年1月1日）まで16日間続き、付近の村々に多大な被害を与えた。その影響は江戸にも及んだという。中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」報告書によると、当時、江戸幕府に勤めていた旗本の一人、伊東祐賢が書いた「伊東志摩守日記」には、宝永噴火の場面が次のように記録されているという。

「十一月廿三日（中略）巳刻時分（午前10～12時ごろ）より南西の方に青黒き山のごとくの雲多く出申し候はば、地は震え申さず候へて震動間もなくいたし、家震え、戸・障子強く鳴り申し候。風少しも吹き申さず候」「午の刻時分（正午ごろ）より南の方にて雷鳴り出し、黒雲の内稲光強くいたし候。雷鳴り申すべく前には、震動強くいたし候。北の方へも白雲次第におおい、たちまち天曇る。午の中刻（午後1時ごろ）より、ねずみ色の灰のごとくの砂多く降り申し候」「夜に入り候へて降り候砂の色黒く、常の川砂なり。昼夜降り候砂、およそ二、三分（数mm）ほど積もり申し候。四つ時（午後9時半ごろ）より空少々晴れ、星出、砂降り申し候。夜半より常の如く月出候、北東は晴れ、西南は黒雲退せ申さず候。七時半時（午前5時ごろ）震動強くいたし、西南の方稲光いたし、雷鳴り申し候。」

このような詳細な記述が、噴火が収まるまで記録されており、富士山からおよそ100km離れた江戸においても、空振や降灰があったことがわかるという。

もし、現代の日本において、富士山が宝永噴火と同程度の規模の噴火をした場合、都市機能が集積した首都圏等にどのような影響を及ぼし、またどのような課題が想定されるか。中央防災会議防災対策実行会議の「大規模噴火時の広域降灰対策検討ワーキンググループ」は、令和2年4月に報告を取りまとめている。同報告では、影響下の人口・資産が大きくなる西南西の風が卓越するケースでは、新宿区付近の累積降灰量は100mmに達し、処理が必要な火山灰量の総量は4.9億 $m^3$ と、東日本大震災の災害廃棄物量の約10倍に達するとする。鉄道は微量の降灰で地上路線の運行が停止し、道路は乾燥時100mm以上、降雨時30mm以上の降灰で二輪駆動車が通行不能になり、電力は降雨時3mm以上の降灰で碍子の絶縁低下による停電が発生し、通信は降雨時に基地局等の通信アンテナに火山灰が付着すると通信が阻害され、また上水道は、原水の水質が悪化し、浄水施設の処理能力を超えることで飲用に適さなくなるとともに、停電エリアでは断水が発生するなどとしており、降灰により長期間にわたり国民生活に多大な影響が及ぶことが想定される。

宝永噴火の49日前の10月4日（10月28日）にはM8.6～9クラスと推測される宝永地震が発生し、東海道から四国まで多大な被害が生じている。富士山噴火時の降灰への対応も含め、総合的な対策を検討することが求められている。